

京都女子高等専門学校で学んだハワイの日系人

坂口満宏

1. はじめに

「連続講座ハワイ日本人移民 150 周年から考える」の第4回テーマ「教育と移民」に関する事例として、ここでは1930年代の京都女子高等専門学校（以下、京都女専）とハワイとの結びつき、京都女専に学んだ日系二世の活動を取り上げ、さらにいくつかの話題を提供したいと思う。

ハワイに多くの日系人がいることはよく知られている。そのルーツは明治初年に始まり、1885年から10年間続いたハワイ王国への出稼ぎで本格化した。その後も自由移民や呼び寄せによってハワイに住む日本人は増え続け、1930年代には4万人近い日本人（すなわち一世）と12万人余りの二世がいた。アメリカがハワイを併合するとハワイ生まれの二世にアメリカ国籍が認められたが、同時に父親の日本国籍も与えられたため、その多くが二重国籍となっていた。しかし国家主義が熾烈をきわめた時代である。この国籍問題が、のちに日本にあっても、ハワイにあっても、「日系二世は日本人なのかそれともアメリカ人なのか」と二世たちを追い詰めることになるのである。

出稼ぎ当初、多くの日本人はサトウキビ畑で働いていたが、その後ホノルルやハワイ島のヒロなどへ移り、日本人社会を作っていた。1890年代末には浄土真宗の布教も本格化し、1899年に今村恵猛が開教使に任ぜられてハワイに渡り、翌年、二代目の監督になるとホノルル別院を拠点とした布教体制が整い、日本語学校も数多く建てられていった。朝はアメリカ人を育てるための学校へ通い、放課後になると日本語学校へ行き、一時間余り日本文化を学ぶというのが二世の日課であった。1929年当時、ハワイの島々に設立された日本語学校の数は以下の通りであった¹⁾。

①中等学校程度	ホノルル 3校	オアフ島ワヒアワ1校	ハワイ島ヒロ1校
②小学校程度	ホノルル 18校	オアフ島 26校	マウイ島 27校
	カウアイ島 21校	ハワイ島 51校	

1930年代という時代は、京都女専に限らず、日本の学校への進学を望む日系学生が急増した時代であった。それというのも30年代になってもハワイや北米では日系人に対する差別や排斥が後をたたず、たとえアメリカの大学を卒業したとしても白人企業への就職は難しかったからで、それならばいっそのこと日本に活路を求めようとする動きが高まったからである。中国における日本の軍事行動も二世たちに日本という国の存在感と日本文化への関心を強めていた。また学資面からみても、円安ドル高の時代、アメリカの大学へ進学するよりも日本で勉強するほうがはるかに経済的でもあった。東京や横浜にもこうした日系学生を受け入れる教育機関が

いくつかあった。男子であれば早稲田の国際学院や同志社大学、女子であれば東京の恵泉女学校や京都の同志社女学校に行くものが多かった²⁾。だが、門徒の子女たち、とりわけ女子学生は、浄土真宗系の学校として京都の東山にあった三つの学校、京都高等女学校（高女）、京都裁縫女学校（裁女）、京都女子高等専門学校（女専）で学ぶため、京都にやってきたのである。

東山三校のルーツは、1899年に松田甚左衛門の助力を得た甲斐和里子（旧姓足利）が仏教精神にもとづく女子教育を実践するために設立した「顕道女学院」にさかのぼり、その志と理念を貫くため、1900年9月に夫の甲斐駒藏とともに設立した文中園（同年11月、文中女学校と改称）に始まった。しかし苦しい学校経営を余儀なくされていた甲斐夫妻は、1910年2月、仏教婦人会連合本部の援助を受けて文中女学校と矢部善蔵が経営していた京都高等女学校を合併し、その後二つの女学校の経営を仏教婦人会連合本部へ移譲した。同年4月、連合会本部は高等女学校令にもとづく学校として京都高等女学校を設立し、校長には朝倉暁瑞が就任、文中女学校は廃校となった。翌年、同じく矢部善蔵が経営していた京都商業女学校を合併し、京都裁縫女学校と改称して併設した。

1912年3月、九條武子仏教婦人会連合本部長らは「女子大学設立趣意書」を発表するも女子大学の設立は認められなかった。いったんは挫折した女子大学設立計画であったが、1919年1月、西本願寺は教団の事業として女子大学の設立を決議し、文部省に申請した。しかし認可には至らなかったため、1920年、専門学校令にもとづく学校として京都女子高等専門学校を開校することになったのである。本科の修業年限は3年で、まずは家政科・国文科・英文科の3学科を設置し、その後学科を増設した。1944年には京都女子専門学校に名称を改めている。旧制の学制では大学令による女子大学の設置がなされなかったため、女子専門学校は女子だけを受け入れる学校としては最上位の高等教育機関であった。

以下ではまず、京都女専関係者とハワイとの結びつきについて述べ、ついで京都女専で学んだハワイの日系人たちの活動について触れる。そして最後に一人の日系女性のルーツを取り上げることにする。

2. 京都女専とハワイとの結びつき

2. 1 甲斐和里子とハワイゆかりの人々

まずは甲斐和里子の略系図を手掛かりに、和里子とハワイゆかりの人々について確認しておこう。

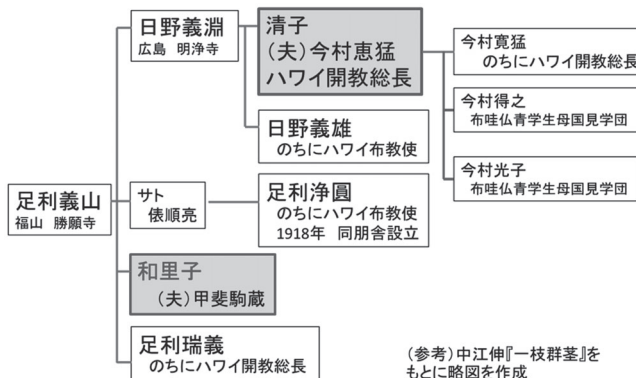


図1 甲斐和里子関係略系図

和里子は1868年に広島県深安郡神辺町（現在の広島県福山市）の勝願寺で父足利義山、母早苗の五女として生まれた³⁾。その兄弟姉妹は、長男義淵、長女サト、次女ヒデ、三女トシ、次男義泉、四女ムツ、三男瑞義であった。

父の足利義山は「明治の高僧」と称された人物で、1890年から7年間、当時の本願寺の法嗣であった大谷光瑞の学事係をつとめ、1891年には宗派最高位の勧学を授けられ、1898年には龍谷大学の前身である大学林総理（学長）に任じられた仏教界の碩学であった⁴⁾。

長兄の義淵は勝願寺に生まれたが、府中明浄寺の養子となり日野姓となった。やがて副住職に寺務を任じ、単身上京して本山に出仕。1900年から文学寮長、中央仏教中学設備委員、仏教高等中学長をつとめた⁵⁾。義淵の次女は、のちにハワイ開教総長となる今村恵猛に嫁いだ清子で、1903年にハワイへ渡っていった。長男の義雄も一時期ハワイで布教使として活動していた。

長姉のサトは俵順亮に嫁ぎ、二男一女を得た。その次男が浄圓であった。しかし浄圓は2歳の時、母と死別し、勝願寺に引き取られた。1895年高輪の仏教大学に学び、開教を志して卒業後の1902年に渡米。シアトル、サクラメント、フレズノやサンノゼの仏教会に駐在し、カリフォルニアの各地に仏教会を設立した。1906年、今村恵猛（いここにあたる日野清子の夫）の招きでハワイに渡った。オアフ島のワイパフ本願寺に駐在し、若い労働者のために夜間学校を開き、仏教青年会も発足させた。翌年にはワヒアワに仏教会を開いている。2年あまりワイパフで布教したが、病のため1908年に帰国した。1918年京都で同朋舎を設立し、数多くの書籍出版に携わった⁶⁾。

弟の足利瑞義は、本願寺の執行を5回、顧問を3回、仏教大学長および龍谷大学長、宗学院長を歴任して人材育成にあたり、父義山と同じく勧学に任ぜられた。1932年に長年にわたりハワイで開教総長をつとめていた今村恵猛が死去すると、その翌年、足利瑞義は老骨に鞭打ってハワイに渡り、1938年まで開教総長をつとめた。童謡「かもめの水兵さん」は、1933年9月、ハワイに向けて横浜を出航する足利瑞義を見送りに来た姪の武内俊子が作詞したものであった⁷⁾。

こうした親族関係からみても、和里子の耳に早くからハワイと日本人移民のことが伝わっていたとしても不思議ではなく、きわめて身近な存在であったことがわかると思う。

ここで今村恵猛と日野清子の結婚にまつわるエピソードを一つ掲げておこう。1899年1月に「布哇国開教使」に任命され、ハワイに渡った今村恵猛は、各地のサトウキビ耕地において布教場と附属小学校を建設する作業に着手した⁸⁾。1902年にはホノルル本願寺の近くに日本語学校（のちのフォート学園）を設立した。ハワイに渡って足掛け3年、開教事業と教育事業も軌道に乗り始めたことから今村恵猛は嫁を取るため日本に一時帰国し、京都にやってきた。

その当時、文中女学校を設立し、女子教育にあたった甲斐和里子は、帰国中の今村恵猛を女学校に招き、ハワイでの仏教布教について講演してもらったという。以下の英文はハワイ本派本願寺100周年誌の一節である。

When the talk ended, Wariko Kai asked her niece, 18 year old Kiyoko Hino, to serve him tea. As she did so Wariko Kai asked her, "Kiyoko-san, how would you like to marry this man and go to Hawaii to help his work?" Years later, telling this story to her daughter Keiko Glenn,

Kiyoko-san related that she hesitated only for a moment before smiling and answering, “Hai!”⁹⁾

ここに出てくる Kiyoko-san が日野清子である。清子は叔母である甲斐和里子が設立した文中女学校の生徒であった。甲斐和里子は清子に講演を終えた今村恵猛にお茶を出すようにと声をかけ、今村恵猛との結婚を勧めたのである。体のいいお見合である。1903年3月26日、文中女学校の第2回卒業式が挙行された¹⁰⁾。卒業後、清子は今村恵猛に嫁ぎ、ハワイに渡った。そして同年、ハワイ仏教婦人会の初代会長に選ばれ、婦人会の基礎を形作っていくのである¹¹⁾。

2. 2 甲斐和里子と朝倉暁瑞 米国の女子教育を視察するため渡米

1915年夏、米国の女子教育を視察するため、和里子は朝倉暁瑞校長とともに太平洋を渡った。最初の寄港地がハワイであった。ホノルルでは本願寺別院を訪れ、多くの日本人信者を前にして女子大学設立への寄附と礼拝堂を兼ねた講堂建設への協力を力説したという。まずは甲斐和里子の随筆集『落葉かご』に収められた「ふるき旅行日記」のなかからハワイ旅行の記事を引いておこう。

大正四年八月三日 校長朝倉暁瑞師、教育視察のため渡米せらるゝにつき、我も同伴の榮を荷ふこととなり、諸教授、生徒達に別れを告げ、午前八時校門を出づ。

七日 春洋丸に乗り、午後二時横浜解纜、始めて淼茫たる太平洋上の人となりぬ。明大の野球選手及び常陸山、梅ヶ谷一行と同船。

(中略)

十七日 今日はいよいよ布哇なりとて朝まだきより船中何となくどよめく。我も荷など取りまとめ、三等室にいたりみれば、写真結婚の花嫁達、終生を契るべき良人との初見参とて、髪の間途方もなく高く、白粉鼻を埋めんばかりに厚く、浅黄の紋付、黒緋の丸帯、見る眼も熱苦しきまでに粧を凝せる一団、各々巨大なる風呂敷包を抱へて居並びたり。我は一同に其の祝福を祈りつゝ、甲板に上りて見れば、布哇島は呼べば応へんばかり近く眼前に立ちたり。山の容樹の態、水の色、久しく陸上の美に飢し眼には、珍らしき美しさいふばかりなし。

本派本願寺布教監督今村恵猛師夫妻（妻君は我が長兄日野義淵の二女）をはじめ、多くの人々に迎へられ、ホノル、本願寺に入りしは午後三時なりき。むかしの教へ子達が打ちより喜びあふ中に、九年ぶりに相見たる姪の清子は「たゞ夢のやうにて」と涙をこぼしぬ。

(中略)

二十二日 我はかねてより、女性の講演なるものには、どうも敬意を払ひかねる性質であるし殊に我が如き無学者が、したり顔に講壇にたゝむこと以ての外なりと、これまでは謝絶しつゝけしが、此の度はやむをえぬよし人々から説かれ遂に婦人会の講演にのぞむ。

二十五日 午前ワイパフ耕地に砂糖大製造所を観る。

二十七日 中学男女学生に講演をなす。其夜世界一の声楽家を称する、メルバ女史の独唱を聞く。

二十九日 本願寺にて婦人会惣会を開かる，群衆堂に溢る。

三十一日 コレヤ号に乗り，午前十時解纜米国本土に向かふ。（以下略）¹²⁾

和里子の日記では8月27日の記事に「メルバ女史の独唱を聞く」とあるが、現地の日本語新聞『日布時事』によれば、8月21日に有田領事夫妻その他とともにメルバの演奏会に出席したことになる¹³⁾。

朝倉暁瑞と甲斐和里子たちのハワイでの動向については、逐次、『日布時事』に報じられていた。そのいくつかを掲げておこう。

◎朝倉暁瑞師来布す

昨日春洋丸にて来布せし人の中には京都なる本派本願寺所属の京都高等女学校長朝倉暁瑞師ありたり。同師は仏教大学の教授をも兼ね約四週間に亘り布哇に滞在して布哇に於ける教務並びに学校の視察をなし尚ほ桑港にも赴き沿岸一帯を巡回して十月末に帰国すべく当分フォート街の本願寺別院に滞在の筈也¹⁴⁾。

◎甲斐女史のこと 朝倉校長と同伴渡米

近く女子大学に改むべき私立京都高等女学校々長兼仏教大学教授朝倉暁瑞氏が、目下当地の教育事情視察中にして今月末渡米すべき旨は前号の本紙に掲載せしが、先頃朝倉氏と同伴し来りし同女学校教頭甲斐^(ママ)おわり子女史は有名なる男勝りの女子教育家にして、学殖頗る深く、曾て故本願寺裏方壽子と共に印度の大旅行を為せし事あり。当地本願寺別院の今村監督夫人清子の伯母君^(ママ)に当る由にて、本社相賀社長の夫人の如きも甲斐女史が以前、大津高等女学校の教授たりし節親しく其薫陶を受けし一人の由なるが、同女史も朝倉校長と共に来る卅一日のウキルヘルミナ号にて渡米、約一ヶ月大陸の教育状態を視察する由¹⁵⁾。

京都女子学園には「1915年8月10日～10月21日米国女子教育視察（ハワイにて）」と添え書きされた古い写真が残されている（図2）。大人たちの最前列中央の小柄な女性が甲斐和里子で、その隣で八の字髭の男性が朝倉暁瑞である。写真には「仏教婦人会聯合本部寄贈」と染め抜かれた下がり藤の旗が見える。しかしこの写真がいつ、どこで撮影されたものであるのか定かではない。籠谷眞智子はこの写真を『甲斐和里子の生涯』の128ページに掲出し、「米国女子教育視察、ハワイ・ホノルル別院での記念写真」とのキャプションを付している。だが*A Grateful Past, a Promising Future: Honpa Hongwanji Mission of Hawaii 100 Year History, 1889-1989*の19ページに収められているホノルル別院の写真（図3）と見比べると、階段や手すりの形に大きな違いが認められるため、ホノルル別院での撮影とはいいがたい。読者諸賢からのご教示をお願いしたい写真の一つである。



図2 朝倉暁瑞と甲斐和里子
〔典拠〕京都女子学園所蔵

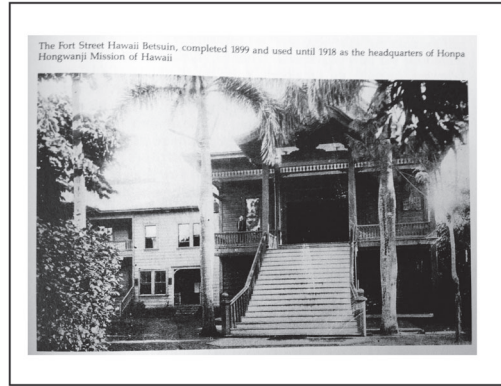


図3 1899年に建立され1918年まで用いられた
フォート街のハワイ別院

〔典拠〕Honpa Hongwanji Mission, Centennial Publication Committee. *A Grateful Past, a Promising Future: Honpa Hongwanji Mission of Hawaii 100 Year History, 1889-1989*. Honolulu: The Mission, 1989, 19ページ。

2. 3 布哇仏教青年会主催 学生母国見学団

1920年代後半になるとハワイやアメリカ西海岸の日本人移民社会では、日本生まれの父母とアメリカで生まれた子どもたち（二世たち）との間で日本認識をめぐるジェネレーションギャップが生まれていた。こうしたギャップを埋めようとして各地の日本語新聞社やキリスト教会、仏教会は、将来有望とみなされた二世たちを選抜して日本に派遣し、日本語学校の教科書などに出てくる日本各地の名所旧跡を見学させるとともに、いまだかつて見たことのない父母たちの故郷を訪問させるという見学団を組織した。

1928年に布哇仏教青年会が主催した「学生母国見学団」もその一つで、今村清子と安井美然が監督となり、ハワイから28人の学生を引率して来日、東京、鎌倉、奈良など仏教ゆかりの地を見学した後、京都には7月7日にやってきた。そして7月10日の午前中に二条離宮、北野天満宮、金閣等を見学し、午後二時には京都女専を訪問するという日程が組まれていた。この母国見学団には今村清子の次男得之と長女の光子も参加していた。

以下は『母国見学記念誌』に記載された当日のプログラムである。

午後二時より平野梅代女史の奉職する京都女子^(ママ)専門学校にて歓迎会あり。プログラムは

- 開会の辞 宇津木教授
- 歓迎辞 弓波校長
- 女子仏青代表 廣濟弘子
- 謝 辞 安井監督
- 所 感 朝倉学監

余興に京都幼稚園児の舞踏、女子仏青会員の合唱、狂言等があった。同夜七時より藤影寮^(編)主催で題道会館でイングリッシュミーティングあり。来会者 約三百名。英語の勤行に始まり

三浦武雄君司会で龍大教授宇津木二秀，京都女専岡本なつ子，龍大玉池純朗，英語会々長藤木龍暁諸氏の歓迎辞，佐藤豊，東町まさえの謝辞等あり。余興は日布両学生対抗の姿で合唱，ハモニカ，独唱，謡曲，尺八等であつた。

○寄贈 京都女専 花瓶（函入り）¹⁶⁾

平野梅代〔正しくはムメヨ〕はハワイ出身の日系二世で，1925年6月から1949年3月まで京都裁縫女学校教諭・女専教授として教鞭をとり¹⁷⁾，1949年に女専を退職して大阪市立大学文学部へ移り，1965年3月教授として定年退官を迎えた教員であった。平野は大阪市立大学を退職するにあたり，その略歴を大学の紀要に残している。文字通り簡略なものではあるが，ハワイで生まれ育った日系二世エリートの一つの典型的な学歴が見て取れることから，少し長くなるが平野ムメヨの略歴を引用しておく。

明治35年 1月16日，米国ハワイ，ホノルル市に生まれた。五才の頃，母につれられて日本に來り，一年余り滞在した。

42年 Kaiulani Grammar School（8年制）に入学。毎日学校がすむと，本願寺附属小学校に通って，日本語を学んだ。これは小学校から中学校を終るまで十年間，アメリカの学校と並行して続けた。

大正6年 Kaiulani Grammar School を卒業。
McKinley High School の General Course に入学

10年 6月，McKinley High School を卒業
9月，University of Hawaii, School of Arts and Science, Course in Language, Literature and Arts に入学

14年 6月，同大学を卒業。間もなく，父母と日本に來り，京都女子高等専門学校教授，京都高等女学校教諭として，英語を教えることとなった。

昭和8年 3月，父死去。翌9年9月，母死去。10年アララギに入会，歌を月々投稿して心を慰めた。この作歌のため，登山し，或は方々を旅行した。北支，満洲，朝鮮，沖繩等にも出かけた。

女専時代の24年間は，主として日本を知ることと，日本語を学ぶことができたように思われる。この頃日本古典の英訳の研究も始めた。

23年 大阪商科大学予科講師（非常勤）となる。

24年 3月，京都女子高等専門学校を退職し，4月，大阪市立大学文学部講師（専任）となった。

大阪市立大学に於ける16年間は英語教授の基礎となる音声学の勉強と並行して，日本文学（特に仏教文学）の英訳を試みた。ところが，日本文化の根底にある仏教思想を学ぶ必要を痛感した。そこで他校えの出講を止め，作歌も断念して余暇を作り，週二日龍谷大学大学院に於て，仏教を勉強した。これは32年4月から，38年3月まで，6年間つづけた。

37年 4月，大阪市立大学文学部助教授。

39年 10月, 教授。

40年 3月, 停年退官。

ハワイに於ける23年間は私の第一の人生だとすれば、日本に於ける40年は、私の第二の人生であった。そのうち前半は女専時代、後半は大阪市大時代である。特に後半の市大時代は、最も愉快地に教鞭を取ることが出来、又勉強や研究にも心を打ち込むことが出来た。この第二の人生も、私にとっては準備時代であったような気がする。私はこれから第三の人生に向かって出発せねばならない¹⁸⁾。

京都女専は、ハワイで生まれ育ち、ハワイ大学を卒業した日系二世の先輩が勤めている学校——。こうした評判はハワイにも伝わっていたことだろう。1930年代になるとハワイやアメリカの西海岸で生まれ育った日系二世の女学生が、続々と京都女専にやってくるのである。

4. 京都女専で学んだハワイの日系人

4. 1 『東山タイムス』に見るハワイとのつながり

ここからは『東山タイムス』に残された記事のなかから日系学生たちの姿を拾いあげていこうと思う。時代の移り変わりとともに、彼女たちを見つめる京女側のまなざしや彼女らに寄せる思いがどのように変わっていったかがうかがえるからである。

『東山タイムス』とは、東山三校(高女・裁女・女専)在校生やそれぞれの同窓会員の和合と読者相互のコミュニケーションを円滑にすることを目的として発行された新聞である。1928年4月12日に創刊され、当初は隔月刊であったがのちに月刊となった。発行所は東山タイムス社(京都高等女学校内)で、印刷所は同朋舎であった。1942年8月20日、「タイムス」という表記は敵性語であるとの理由から『東山学園時報』に名称を変更したのち、1944年1月20日の第169号に「挺身隊員」の名簿を掲載し、休刊となっている¹⁹⁾。

こうした『東山タイムス』のなかから、まずは1930年4月11日に挙行された女専の入学式と入学許可者の氏名と出身地を掲げた記事から見てみよう²⁰⁾。記事の大部分は日本国内各地の女学校から女専に進学してきた学生たちの名簿で、国文科の入学許可者は103名。そのなかにハワイ出身1名、朝鮮出身7名、台湾・大連の出身者各1名の名前を見出すことができる。同様に家政科59名のなかには大連出身者が1名、英文科27名に朝鮮出身5名、台湾出身1名の学生がいた。京都女専はハワイ出身者にとどまらず、朝鮮や台湾など日本の植民地に設立された女学校を終えた学生が目指す学校でもあったのである。ちなみにハワイからやってきた学生は濱田ミツエで、マウイ島はパウエラの出身であった。

『東山タイムス』第16号(1930年11月15日)に掲載された岡田倭文の「布哇便り」は、1930年7月、アメリカの教育事情を視察に行く女専の教師藤井制心がハワイに立ち寄った際、ハワイにおいて高女と女専の同窓会と藤井先生の歓迎会が開かれたことを報じるものである。写真とともに以下のように参加者の氏名と卒業期が記載されている。

後列向かつて右より井田壽栄(旧中森, 五回), 鈴川フジ代(十四回), 今井文子(旧沖,

五回)、岡田静子(五回)、○前列 梅原開教師、藤井先生、中村キヨノ(旧畑、二回)、日野尚子(旧中山、三回)、梅原トシ子(九回)²¹⁾

彼女らはハワイ生まれの二世ではなく、日本に生まれ京女で学び、卒業後、開教師の妻などとしてハワイに渡った人たちであった。そして『東山タイムス』第25号(1931年11月20日)には「ホノル、より」と題する梅原とし子からの通信文が掲載され、10人ほどではあるが、ハワイに「京都女学校の会」が作られていると伝えていた。

前略 こちらで京都女学校の会を作つて居りますが学校の有様が判りませんので、新聞なり雑誌なり送つていたゞき度う存じます。会員が十名程ありますので若し費用が要れば送りますから、十人分丈と同窓会名簿とを送つて下さいませ²²⁾。

こうしたハワイとのつながりがあったからであろう、1932年9月、ハワイから7人の留學生が京女にやってきたのである。『東山タイムス』第37号(1932年11月20日)には9月5日の出来事として「布哇よりの留學生七名に対し夫々學歷詮衡の上相当学年に入学許可す」との記事とともに、彼女たちの写真を載せている²³⁾。



泣妹妹のられわたれき學入らか哇布

図4 「布哇から入学されたわれらの姉妹達」
〔典拠〕『東山タイムス』第37号、1932年11月20日

本来ならば当時の学籍簿等を徹底的に調べあげ、彼女たちの氏名と入学を許された学校と学科、学年、出身地等を特定すべきであるが、現時点では実現できていない。今後の課題である。

4. 2 日系学生のための親睦団体「ロータス・クラブ」

布哇若しくは北米から来て、本校(女専)又は京都高女に学ぶものが年一年と殖えて来るので、朝倉先生並に藤井、平野、小谷諸先生の指導の下に、ロータスクラブをつくること、

なり旧臘二十一日その発会式を挙げた。メンバーは十八名、何れも東山学園に在学せるもので、仏教精神を基調として明るい生活をしたといふのが、全部倶楽部員の希望である²⁴⁾。

ハワイから一度に7名の学生が入学してきたことがきっかけになったのだろう。1932年12月21日に東山三校で学ぶ日系学生たちによる親睦団体「ロータス・クラブ」が発足したという記事である。その後もロータス・クラブは、日本文化の共同研究を進めるとともに、日系人どうしの親睦をはかるため、予餞会や新入生歓迎会を開催していた。

しばしば『東山タイムス』は日系学生による英文エッセイを載せていた。ここでは「WHAT THE LOTUS CLUB IS DOING」と題された無署名エッセイの一節を掲げておく。1935年の6月上旬頃に書かれたもので、ロータス・クラブでの取り組みに始まり、異文化との出会いや適応においての戸惑いが素直に綴られている文章である。

On April 18th the Lotus Club called the first meeting of the new school year to order and officers of the coming year were elected.

With the opening of the semester, three new members were welcomed. One is from Wapato, Washington, one from Los Angeles, and the other from Honolulu.

(...) A book on "Religion and Life" written by Reverend Umehara is being read and studied by the members now. Such readings on religion and other topics will be part of our constant club work. This book was kindly given by Principal Asakura and for discussions on that subject we will hold meetings presided over by our principal and other teachers. We do not doubt this work will help the members to increase their knowledge of the Japanese language and at the same time to learn something about religion, especially Buddhism. In this way we are all trying to fulfill the purposes and aims upon which the Lotus Club was organized.

(...) There are now twelve members in the club, two from Seattle, one from Los Angeles, four from Honolulu, and five from the island of Hawaii.

We are all enjoying school life now although we have had many struggles to accustom ourselves to our new surroundings.

I guess this holds true to almost everyone who has come to Japan with high hopes of obtaining education. Conditions here seem to be disappointing in every way at first and naturally we are led to hold prejudicial views against almost everything.

This happily does not last long in many cases. As months and years pass by the deepness and beauty of Japanese culture will be more and more appreciate.²⁵⁾

さらに4年が過ぎ、1939年2月になると日系学生も30名余りに増えていた。「祖国に咲くロータスの花 日系アメリカ女性達のうれしい集ひ」と題されたロータス・クラブの活動報告は和

やかな雰囲気を与えていた。

太平洋の波濤を越えて祖国一桜の国日本へ笈を負うて渡日した彼女たちは、わが学園に籍をおいてから温き師恩に、濃やかな友情に育まれ乍ら学舎に寮舎にグラウンドに、花壇にいつも、軽快なステップを踏みつゝ、愉快的な学生々活を送つてゐる。明朗そのものゝやうな二世一使ひなれぬ日本語に対する不安感も二三ヶ月するともうすつかり除かれて言語容姿ともに日本化して可愛い、口唇を割つてクラシカルな京言葉がリズムカルにとび出してくる。本校独自の精神教育を受け日本女性としての特性を磨き、哲学に、芸術に、茶道に、謡曲にとつた方面の趣味を養つてゐる。

現在学園には約三十名の二世があるが相互の親睦をはかるため一つは日本文化の共同研究機関たらしめるためにロータス・クラブを組織してゐる。

毎年それらクラブ員の中に数名の卒業生を出し、帰米後各方面に活躍してゐる。今春も国文科井元静江、技芸科古武静子二姉が卒業することになつてゐるので、在校クラブ員はこれら卒業の栄冠を得んとしてゐる二姉のために予餞会を催すことになり、二月十八日午後二時から国文予科教室でロータスの集いがあつたが、父母の膝下へ錦を着て帰る二姉の多幸を祈つた。平野教授を始めクラブ員全部出席懐しいあちらの話、うれしかつたこちらの話が、取交され和やかな歓談に半日を過ごした²⁶⁾。



図5 1939年「日系アメリカ女性達のうれしい集ひ」
〔典拠〕『東山タイムス』第111号、1939年2月20日

しかし日中戦争が長期化し、日米関係にも暗雲が立ち込め始めた1941年2月になると彼女たちの描かれ方は一変していった。

祖国に咲くロータスの花 我が学園に学ぶ日系アメリカ女性のうれしい集ひ

太平洋の波高き今日この頃、万里の波濤を越えて、はるばる笈を負うて祖国日本に帰り、我が学園に学ぶ者約三十名に及んでゐるが、これら女性の結ぶロータス・クラブでは卒業会員の予餞を兼ねて、去二月十二日午後三時から本校内同窓会館ホールで懇親会を開いた。

常にこれら女性の指導者として面倒を見らるゝ平野教授を始め主幹堀川教授も出席午後の一ときを楽しく過ごした。父を、母を米大陸に残し健気にも皇国の道を学ぶこれら女性の心の雄々しさに敬服させられ、激励の辞を惜しみなく呈した。皇国民として生れた喜びと皇国の尊さを仰ぎ、無窮の天恩に浴した感激を海の彼方の父に、母に伝えたいと学園をこの春巣立つ生徒は感泣してゐる。温き師の恩、忘れ得ぬ友情、母国の山河——これら女性は学園に入学以来、皇国民としての覚悟を新にし、日本精神の旗幟を高らかに掲げ波濤を蹴つて米大陸に向はんとしてゐる。日本語も流暢になつた。殊に国文科に籍をおいて幽玄、難解古典文学をよく咀嚼し螢雪の功なり、近く卒業の栄冠を勝ち得んとして有賀幸子姉の孜々としてたゆまなかつた努力に満腔の敬意を表したく思ふ²⁷⁾。

「……これら女性は学園に入学以来、皇国民としての覚悟を新にし、日本精神の旗幟を高らかに掲げ波濤を蹴つて米大陸に向はんとしてゐる」。もはや彼女たちは日系アメリカ人の学生ではなく、「皇国民」としてハワイに送り出されることになつたのである。

ハワイにあっては「100%のアメリカ人」として振舞うことが求められていた。日本にやってくると彼女たちは「日本女性」として、さらには「皇国民」たる自覚を持つことが求められた。この半年後には「タイムス」は敵性語だとして『東山学園時報』へと改められる時代である。上述した記事を最後にハワイやアメリカ出身の日系学生に関する記事も皆無となつた。その後の彼女らの消息はつかめていない。「皇国民」としての教育をうけた彼女たちは、その後ハワイでどのような人生をおくつたのだろうか。ハワイの二世市民たちは彼女たちをどのように受け入れただろうか。京女の歴史とともに見つめていかねばならない課題である。

4. 3 今村恵猛・清子の二女 今村恵子さんのこと

「母親は今村恵子といいます、アメリカ生まれですが、かつて京都女子高等専門学校に在籍していました……。京都でどのような学生生活を送っていたのか知りたいので、母の学業成績証明書を持参して訪問します……」こうした趣旨のメールが2015年3月、京都女子大学の国際交流センターに届いた。発信者はバーニス・パウズさん (Bernice Bowes, のちに Bernice Glenn) という女性だった。今村恵子とは今村恵猛・清子夫婦の二女で、バーニス・パウズさんは今村恵猛と清子の孫にあたり、甲斐和里子と結びつきのある方だ……。さあ、どのようにして出迎えようか、ということで大変なことになつたのである。

京都女専に学んだハワイからの日系人についてはある程度調べを尽くしたつもりでいたが、今村恵猛と清子の娘が京都女専に学んでいたとはまったく知らなかつた。そこで直ちに『東山タイムス』をめくり直してみることにした。すると今村恵子の名前が出てくるではないか。ただしそれはロータス・クラブなどの日系人に関する記事ではなく、「聖戦下 第二十二回卒業式挙行 「いざ往け」——奏でる進軍譜」と題された、1942年9月に挙行された繰り上げ卒業を報じた記事のなかであつた²⁸⁾。

最終学年の学生といえども、学年末の3月まで在籍して勉学に励み、卒業していくのが本来の課程である。しかし戦局の悪化にともない不足する労働力を補うため、卒業を3か月繰り上げ、学生たちを速やかに社会に送り出すという方策がとられた。それが繰り上げ卒業である。京都

女専では勤労働員に対応するため1941年12月に最初の繰り上げ卒業が実施された。それが42年になると夏以降のすべての授業を休止し、学生を勤労働員に派遣しなければならなくなった。最終学年の学生に限らず9月以降に学生たちが受講できる授業はない。こうして京都女子高等専門学校の第22回卒業式は、6か月繰り上げられ、1942年9月28日に挙行されることになったのである。卒業生数は家事科90名、技芸科91名、国文科54名、英文科13名であった。

今村恵子の名は二か所あった。一つ目は卒業式において表彰された「成績優秀名誉校長賞受賞者」のなかで、「英文科 今村恵子」と記されていた。「成績優秀名誉校長賞」とは各学科で席次2番の者に授与される賞であった（席次1番の者には「成績優秀本願寺賞」が与えられていた）。二つ目は同じ紙面の「卒業に面して私は斯く思ふ」と題する特集記事のなかに「英文科 今村恵子」とあり、彼女の小文が掲載されていた。その最後の段落部分を引用しておこう。

私達は今、未知の社会に向つて各々希望を荷つて学窓生活ををようとしてみよう。しかし如何に希望の実現が夫々異つてみようと私達は先づ以て卒業の年限短縮の意義を十分認識して各自の職域に最善を尽くし国家の要望に応へなければならない。又私達は年限短縮の為知識上四ヶ年の課程は一通り終つたといへるにしろ力に於ては疑問にかけられても仕方がない事もあらう。故に私達は卒業後も絶えず自ら切磋琢磨して学業の補充に意を留めねばならない。卒業といふ目的に対して緊張した学校生活を終へてしまふと咄嗟にさうした目的もなくその日その日の流れる様に過してしまふ事が最も恐ろしい事ではなからうか。学園生活も後僅かである。そして紅葉に縁だられた清らかな校門ともお別れである。しかし私は機会さへあれば校門を訪れるつもりだ。そして永久に学生の気分を失ひたくない²⁹⁾。

戦争という時代のなかにあつて繰り上げ卒業が求められる意義はわかる、しかし私達にはまだまだ勉強が必要だ、卒業したくない、「永久に学生の気分を失ひたくない」——。そうした思いがひしひしと伝わってくる文章である。

京都女子学園には古くから「1939年 女専 ハワイからの留学生」とメモ書きされた写真が伝来していた。この写真をバーニスさんに見せたところ、向かって左端に立っている女性が今村恵子さんであると指摘してくれた。京女とハワイが太く強く結びついていたことが明らかになった瞬間であった。

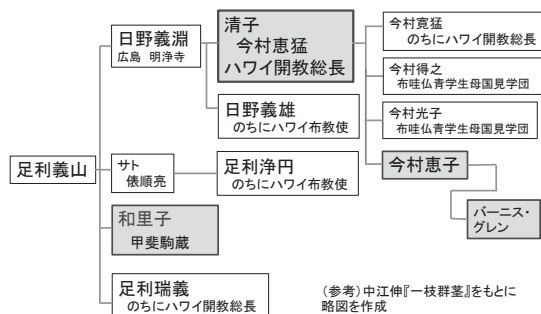


図6 今村恵子関係略図



図7 1939年 女専 ハワイからの留学生
〔典拠〕京都女子学園所蔵

今村恵子の女専卒業後の足取りは定かではない。バーニスさんが持参した学業成績証明書の発行日は「昭和二十三年二月二十七日」となっている。卒業後もハワイに戻ることなく日本に残っていたものと思われる。そして戦争が終わって2年余りたった1948年2月に京女を訪れ、成績証明書を発行してもらった。その証明書を持って彼女は「アメリカ人」としてハワイに帰ったのだろう。そしてアメリカ空軍に勤める Ned W Glenn さんと結婚、Keiko Imamura Glenn となった。本稿の97～98ページで紹介した今村恵猛と清子の結婚エピソードを語っていた Keiko Glenn とはほかならぬ今村恵子だったのである。

その後 Keiko Glenn はハワイにあったリベラルアーツの大学ロア・カレッジの教授として教壇に立ち、1991年2月7日、69歳で亡くなった。彼女の墓は夫とともにホノルルの国立太平洋記念墓地（いわゆるパンチボール）に残されている³⁰⁾。

5. おわりに

最後に第二次大戦後のこととして、京都女子学園の同窓会だよりのなかからハワイ関係記事を拾い上げ、年表風に並べておこう。

- 1961年5月 京都女子学園同窓会、初のハワイ支部会開催
(『京都女子学園同窓会だより』第2号, 1961年)
- 1964年 京都女子大学同窓会 ハワイ支部を結成
(『京都女子学園同窓会だより』第3号, 1964年)
- 1971年 同窓会主催 ハワイ旅行
(『京都女子学園同窓会だより』第9号, 1972年)
- 1972年6月12日 恵子・グレン (ハワイ ロア大学教授)
学生を引率して来日し母校を訪問、歓迎会を開催
(『京都女子学園同窓会だより』第10号, 1973年)

ハワイへ旅行する機会があれば、ハワイの各地にあるお寺を訪ねてみるといいだろう。本願寺系のお寺であれば、「私は京女の卒業生ですよ」という年配の女性がまだまだ元気に活躍されている。京都女専の更なるルーツに出会えるかもしれない。

注

- 1) 布哇報知社, (1937)『日本語学校勝訴十周年記念誌』
- 2) 吉田亮編著, (2012)『アメリカ日系二世と越境教育 - 1930年代を主にして』, 不二出版
- 3) 籠谷真智子, (2002)『甲斐和里子の生涯』, 自照者社出版, 3
- 4) 教区報専門委, (2013)「備後学僧逸伝 其の十 鴨川組勝願寺第23代住職 足利義山」『備後教区報』, 備後教区教務所 149,4
- 5) 教区報専門委, (2013)「備後学僧逸伝 其の11 鴨川組勝願寺第23代住職 足利義山 (2)」『備後教区報』 備後教区教務所 150,7
- 6) 教区報専門委, (2011)「備後学僧逸伝 僧籍を返上して理想を求めた学僧 足利浄圓師」『備後教区報』

備後教区教務所 143,4-5

- 7) 教区報専門委, (2011)「備後学僧逸伝 鴨川組勝願寺第二十四世住職 勸学足利瑞義」『備後教区報』備後教区教務所 142,4-7
- 8) 守屋友江, (2001)『アメリカ仏教の誕生—二〇世紀初頭における日系宗教の文化変容』, 現代史料出版 101-104
- 9) Honpa Hongwanji Mission, Centennial Publication Committee. *A Grateful Past, a Promising Future: Honpa Hongwanji Mission of Hawaii 100 Year History, 1889-1989*. Honolulu: The Mission, 1989, pp.28-29
- 10) 「角田柳作 WEB 展」明治三五年度文中園第二回卒業式 明治 36 年 (1903) 3 月 26 日 http://www.wul.waseda.ac.jp/tsunoda_web/p7.html, 最終アクセス日 2019 年 5 月 23 日。
- 11) The Hawaii Federation of Honpa Hongwanji Buddhist Women's Association. *HOSHA, A Pictorial history of Jodo Shinshu Women in Hawaii*. Honolulu:1989, p.25
- 12) 甲斐和里子, (1949)『落葉かご』, 百華苑 122-124
- 13) 『日布時事』1915 年 8 月 23 日
- 14) 『日布時事』1915 年 8 月 17 日。なお, 適宜句点を付した。
- 15) 『日布時事』1915 年 8 月 21 日, 適宜句点を付した。
- 16) 布哇仏教青年会編, (1929)『母国見学記念誌』, 109。適宜, 句読点を付した。
- 17) 京都女子学園史編纂委員会, (1990)『京都女子学園八十年史』, 651
- 18) 前掲「平野ムメヨ教授略歴」『人文研究』大阪市立大学 16 (2),110
- 19) 前掲, 『京都女子学園八十年史』116
- 20) 『東山タイムス』第 13 号, 1930 年 5 月 12 日
- 21) 『東山タイムス』第 16 号, 1930 年 11 月 15 日
- 22) 『東山タイムス』第 25 号, 1931 年 11 月 20 日。なお, 適宜, 句読点を付した。
- 23) 『東山タイムス』第 37 号, 1932 年 11 月 20 日
- 24) 『東山タイムス』第 40 号, 1933 年 2 月 20 日
- 25) 『東山タイムス』第 67 号, 1935 年 6 月 20 日
- 26) 『東山タイムス』第 111 号, 1939 年 2 月 20 日
- 27) 『東山タイムス』第 135 号, 1941 年 2 月 20 日
- 28) 『東山学園時報』第 155 号, 1942 年 10 月 20 日
- 29) 『東山学園時報』第 155 号, 1942 年 10 月 20 日
- 30) <https://www.findagrave.com/memorial/702320/keiko-glenn>, 最終アクセス日 2019 年 5 月 23 日。

